

Okayama EU Letter

Vol. 17

岡山EU協会会報 2025. 9



2025年度理事会・総会が6月11日（水）、岡山市内のホテルで開催され、任期満了に伴う役員改選の結果、会長の梶谷俊介（岡山経済同友会代表幹事、岡山トヨタ自動車株社長）の後任に中島義雄（岡山経済同友会代表幹事、ナカシマヘルスフォース株社長）を選出した。梶谷氏は筆頭理事に就任。

総会には会員75人が出席（委任状含む）し、本年度の事業計画などを承認した。続いて記念講演では、Jリーグシャレン選考委員で元日本政策投資銀行岡山事務所長の傍士銘太氏が「EU生活と街なかボールパークの大潮流」と題して講演を行った。懇親会では中島基善理事の乾杯の挨拶の後、梶谷俊介前会長へ花束贈呈が行われた。

[第1号議案] 2024年度 事業報告

1. 欧州の経済・文化を深く知るため 「EU講座」を開催など

2024年度岡山EU協会理事会・総会を6月10日（月）岡山コンベンションセンター・レセプションホールで開催した。理事会・総会では2023年度事業報告、収支計算書報告、役員の選任についての承認、2024年度事業計画、収支予算書の承認が行われた。

総会後は、駐日欧州連合代表部のアイレ・コーケ参事官（政治・広報部長）が「日・EU関係一激動の時代における戦略的パートナーシップ」と題し講演した。また、懇親会を着座形式で開催した。

EU講座開催については、第32回EU講座を2025年2月10日（月）講師にラ・グランド・コリース・ジャポン（株）代表の大岡弘武氏を講師に迎え「大岡弘武のワイン造り フランスから岡山へ」と題して開催した。

駐日欧州連合代表部で開催されるEU協会全国総会は、本年度は2024年12月11日（水）に開催され、岡山EU協会を含む各地EU協会9団体が参加した。総会ではニヨッキ副代表・公使の挨拶のあと各EU協会より活動報告が行われた。その後、代表部より新欧州委員の紹介、重要政策の説明、駐日欧州連合代

表部の活動、日本とEUの関係について等の報告が行われた。また、今年開催される大阪・関西万博への出展等を含め、今後も積極的に各地の協会に出向き交流を深めていきたいとのことであった。

2. 「EU Letter」の継続発行

年1回発行しており、10月に第16巻を発行した。

EU講座30回、31回の内容の他、6月10日開催の理事会・総会での決定事項、事業・監査報告、アイレ・コーケ氏による記念講演の講演要約を掲載した。

3. 岡山EU協会のホームページの充実

岡山EU協会内外への情報発信強化を目指し、会長あいさつ、協会会則などを常時掲載し、理事会・総会・EU講座の開催日のお知らせなどをイベントカレンダーとして掲載している。

4. 会員の増強を図る

2024年4月は法人62人、個人48人でスタートした。途中、複数の入退会があり、2025年3月末は法人66人、個人45人となった。今後も入会の声掛けに努め、会員の増強を図る。

[第2号議案] 2024年度 収支計算書

(2024. 4. 1 ~ 2025. 3. 31)

収支決算

収入総額	3,093,791円
支出総額	988,175円
差引残高	2,105,616円 (2025年度に繰越)

(単位：円)

収入の部

科 目	決算額	予算額	差引額	摘要
年会費収入	1,395,000	1,545,000	-150,000	
参加会費	-	-	-	
雑収入	1,136	16	1,120	・普通預金利息
前年度繰越金	1,697,655	1,697,655	-	
合 計	3,093,791	3,242,671	-148,880	

(単位：円)

支出の部

科 目	決算額	予算額	差引額	摘要
総会費	409,190	650,000	-240,810	・会場費(理事会・総会・講演会) 316,410 ・講演料 他 92,780
EU講座等運営費	376,811	600,000	-223,189	・第32回EU講座 376,811
広報費	145,550	150,000	-4,450	・会報発行 139,148 ・ホームページ維持管理 6,402
事務諸費	56,624	100,000	-43,376	・通信費 22,694 ・出張旅費 32,240 ・その他雑費 1,690
予備費	-	50,000	-50,000	
合 計	988,175	1,550,000	-561,825	

会計監査報告

2024年度の会計について監査を執行し、収入・支出ともに正確に記帳整理されており、帳簿・証拠書類の保管は完全であることを認める。

2025年5月14日

監 事

田村正敏

監 事

高橋邦彰

[第3号議案] 2025年度岡山EU協会役員

会長	岡山経済同友会代表幹事	中島 義雄
副会長	駐日欧州連合代表部政治・広報部長	アイレ・コーク
副会長	岡山大学学長	那須 保友
副会長	岡山県国際経済交流協会会长	加藤 貞則
副会長	岡山県経営者協会会长	野崎 泰彦
顧問	岡山県知事	伊原木隆太
顧問	駐日欧州連合代表部大使	ジャン=エリック・バケ
顧問	岡山ガス会長	岡崎 横
理事	岡山経済同友会顧問	梶谷 俊介
理事	岡山経済同友会顧問	宮長 雅人
理事	岡山経済同友会顧問	松田 正己
理事	岡山経済同友会顧問	松田 久
理事	岡山県経済団体連絡協議会座長	中島 基善

理事	岡山経済同友会代表幹事	加藤 貞則 (新任)
理事	岡山経済同友会常任幹事	古市 大藏
理事	岡山県中小企業団体中央会会长	藤木 達夫 (新任)
理事	大学コンソーシアム岡山会長	井尻 昭夫
理事	岡山県文化連盟会長	若林 昭吾
理事	福武教育文化振興財団代表理事	理事長 松浦 俊明
理事	岡山市長	大森 雅夫
理事	倉敷市長	伊東 香織
理事	山陽新聞社社長	桑原 功 (新任)
理事	R S K ホールディングス社長	物部 一宏 (新任)
理事	岡山放送社長	鈴木 裕一 (新任)
理事	テレビせとうち社長	仮谷 寛志 (新任)
監事	岡山県商工会連合会会长	田村 正敏
監事	岡山県商工会議所連合会専務理事	高橋 邦彰

[第4号議案] 2025年度事業計画 (案)

1. 欧州の経済・文化を深く知るため「EU講座」を複数回、開催する
2. 会報「EU Letter」を継続発行する
3. 岡山EU協会のホームページの充実を図る
4. 会員の増強を目指す
5. EUとの友好促進事業を実施・共催・後援する

[第5号議案] 2025年度 収支予算書 (案)

(2025. 4. 1 ~ 2026. 3. 31)

収入の部				
科 目	2025年度予算	2024年度実績	差引額	摘 要
年会費収入	1,445,000	1,395,000	50,000	・法人会員 @20,000円×(60+欧州連合1) ・個人会員 @ 5,000円×45
雑収入	2,000	1,136	864	・普通預金利息
前年度繰越金	2,105,616	1,697,655	407,961	
合 計	3,552,616	3,093,791	458,825	

支出の部				
科 目	2025年度予算	2024年度実績	差引額	摘 要
総会費	650,000	409,190	240,810	
EU講座等運営費	900,000	376,811	523,189	・EU講座 (@20万→@30万×3回) 等
広報費	150,000	145,550	4,450	・会報発行 140,000円 ・ホームページ維持管理 10,000円
事務諸費	100,000	56,624	43,376	・通信費 ・消耗品費 ・出張旅費など
予備費	50,000	-	50,000	
次年度繰越	1,702,616	2,105,616	-403,000	
合 計	3,552,616	3,093,791	458,825	

■講演要約

EU生活と街なかボールパークの大潮流

6月11日 2025年度岡山EU協会総会講演 於 岡山コンベンションセンター

■ Jリーグ・シャレン選考委員／元日本政策投資銀行岡山事務所所長 傍士 銀太 氏

傍士 銀太（ほうじ セんた）氏 プロフィール



1955	高知市生 潮江東小・土佐中・高卒、慶應義塾大学経済学部卒
1980	日本開発銀行（現日本政策投資銀行）に入行
1984～86	経済企画庁内国調査一課出向「経済白書」執筆
1998～2001	日本政策投資銀行 フランクフルト（ドイツ）首席駐在員 岡山経済同友会来独 清音夢テラス顧問
2004	岡山事務所長
2005	岡山欧州まちづくり視察団同行
2006	地域企画部審議役 Jリーグ理事
2009～13	（一財）日本経済研究所 専務理事 地域未来研究センター長
2018～	（学校法人）土佐高等学校理事長

- ・元Jリーグ理事（2006～14）経営審査／シャレン選考委員
- ・日本サッカー協会国際委員（1998～2013）・北九州／山梨県球技場検討委員
- ・長崎県総合計画策定委員（2007）・元構造改革特区評価委員・元南日本新聞客員論説委員
- ・元整備新幹線問題調整会議有識者メンバー（地域交通）・元長野県並行在来線（しなの鉄道）経営検討委員
- ・ボランティア国際年：感謝状（国際オリンピック委員会＆国際サッカー連盟）（2001）
- ・日本プロスポーツ大賞功労賞（2014）・慶應大学院非常勤講師継続（2005～）
- ・和歌山県貴志川線再生手伝い（2006）→「未来をつくる会」会員継続中
- ・青森県企画部職員研修塾（2008～11）・東北主要都市職員研修

<著作>・「都市のルネッサンスを求めて」（2003宇沢弘文共著：東大出版会）
・「百年構想のある風景」（2014 ベースボールマガジン出版社）

<主な活動>（配布）

・ご当地ナンバー（自動車）の提唱・推進 ・Jリーグ：「スタジアムの未来」執筆・監修

地方分権

私がヨーロッパ、ドイツに行ったのが1998年で、ちょうど欧州が統合され、ダイナミックな1990年代を迎えた時だった。スポーツでもワールドカップより地域クラブをみんな応援していた。フランクフルト生活がヨーロッパの統合から拡大を迎えた時期で、国より地域の競争力を重視する、連携よりも連帯、助け合うことを非常に重視しているのに気がついた。ドイツの価値観も変わって、成長や利益よりも安定や幸福を重視しているのがEUの新しい姿だった。「緑の党」が出てきたのもこの頃だ。EUは地方分権国家、日本と韓国だけが中央集権のまま。結局、1つの中心だけで周りへ命令が届かないのが中央集権だった。中央集権はまちを作る土木中心で、地方分権は作ったまちをどう使うか使い方を考えて工夫する。中央集権の場合、まず予算から始まるが、分権は予算が馴染まず人を大

事にする。エンジンに例えると中央集権はロギアしかない車、分権はドライブモード、その動きに合わせていろいろギアが変わる。中央集権は男社会、地方分権は女子力を重視して小さいもの、弱いものを大事にする。分権は権限を分別する中心機能を分散させることだった。

スポーツの世界では、トーナメント制が中央集権でリーグ戦、ホーム＆アウェイの方式が分権の姿だった。コンピューターで言えばホストコンピューターのシステムが中央集権で、クライアントサーバー型の分散した姿が分権だ。

市民の意識が個の自立を果たしている。自立には3つの要素があって中央集権の場合はまずお金をどうするか、財源がスタートでその次に誰がやるかという権限、この2つは英語で言えばHow、どんなものを作るとかという意識の自立を最後に持ってきている。



Whyという英語が最後に来る。分権はこんな地域になりたいとまず描く。権限の現場決定システムが出来上がり、最後にお金はどうしようとやっていた。

小さな町村がヨーロッパにはたくさんあるが、合併をせず、誇り高い。中央という概念が一切ない。よく日本でローカルを地方と訳すが、外国人に聞いたら地方ではなく、地元だ。日本の上り下りというくだらない概念もない。

地方分権社会、EUの生活をした時、全てが地域に分散された社会だと感じ、日本人が東京や首都圏に対して持つ意識とは正反対だった。中央、地方の差別がなく生活水準が全国的に標準化され、都市圏、農村地帯の経済格差を感じない村や町だった。日本の過密の原因は政治や経済、文化、あらゆるジャンルの中心が東京に来ていることだ。

欧州の特徴の一つ目は人口が分散していること。少ない社会的な人口移動がなせる技で、入学だから就職だから動く、転勤があるとかがない。都市の機能分散も、ベルリンに首都移転した時にボンから全部の省庁は移らなかった。今も6、7省庁残っている。分散されたものをつなぐのがインフラで、自動車や鉄道、水運、航空すべて地域相互を結んでいる。

地域に密着した大企業が常に存在しており、本社所在地を変えない。フェラーリは、イタリアのいまだに2万人ぐらいの町に本社を構えたまま動かない。大学が分散しており、教育が州の政策なので文部省みたいなものではなく、教育は地域の役割になっている。ヨーロッパでは広場がどこの町にもある。移動遊園地があり、広場に年に何回か来る。州の分け方も、地理的ではなく地域の歴史性を重んじている。

一番大きかったのは、地元の存在感を示す、誇りを表現する事柄がたくさんあったこと。走る地域の廣告塔、日本で言うご当地ナンバーだ。サッカーに関して言うと、ちょうど私が行く前、フランスのリーグ戦の



優勝チームがブルゴーニュ地方のオセールという町のチームだった。オセールがパリ・サンジェルマンをホームに招いた時、セレモニーで「パリの皆さん方には味わえないブルゴーニュのワインをプレゼントします」ということをやったというニュースが出て、感激した。ミシュランの本にレストランの住所、町の人口が書かれている。イタリアで星のレストランが150あり、そのうちの100が1万人未満の町にあった。ドイツはベルリンが6だが、全体は200ある。こういうことが大事だ。

音楽では、プロのオーケストラがたくさんあった。5万人以上の町には必ず音楽学校を作るという文化政策で育った子が、地元のオーケストラで演奏する。だからすごく安く、年金生活者も500円ぐらいで聴けた。日本は政令市以上でプロのオーケストラがあるが、政令市以外では高崎市、山形市、金沢市しかプロのオーケストラがない。スポーツも子供たちが本物を見る機会があるのは大事だ。ヨーロッパの場合、各市町村にスポーツクラブがある。

スタジアムの未来

まちなかボールパークの話をしたい。25年前、私は日本政策投資銀行の首席駐在員としてドイツのフランクフルトに赴任した。その時、地域活性化という業務に伴って欧州の各地を回り、スポーツの持つ大きな力を感じた。いろんな兼職はその活動の出会いの人たちから推薦をもらってなっているのだ。そこで8つの哲学を見つけ「スタジアムの未来」という冊子を監修している。注目は、スイスのバーゼルにあるスタジアムで、まちなかで駐車場がいらず、徒歩、路面電車かバスで行ける。屋根に太陽光パネルを設けたエコスタジアムだった。地下には大ショッピングセンターがあり、最上階には107戸の高齢者施設があって、試合がある日には孫をはじめ家族が集まって高齢者が元気づ

いていた。利便性がある好立地、十分な収容能力、情報通信の最新設備、医療体制、厨房完備の温かい食事供給など全てが満たされている。

だから災害時に大規模ベースキャンプや住民の安心安全な防災スタジアムの価値がある。帰国後こうした市街地スタジアムの意義を全国各地に伝えた。それから四半世紀が経って広島、長崎、北九州、京都、金沢などでもまちなかスタジアム、まちなかボールパークが続々と登場している。PCR検査会場、学園祭、体育祭やコンサート会場として貸し出したり、保育園、クライミング場、高齢者向けフィットネス施設などに利用するなど、施設の稼働率の実績を高めている。地域に根ざしたスポーツ文化には地元への愛や誇りを醸成し、個の力によって閉塞感漂う地域社会を変えていく強い力がある。豊かなスポーツ文化の源泉になるもの、地元愛が表現された日常の生活空間、地域のシンボルや誇りとしての進化する姿が次世代のスポーツスタジアムの姿ではないだろうか。

アリーナとかスタジアムではなく広島や長崎のように全てを兼ね備えた同時に実現できるようなまちづくり、それが縦割り行政や官や民の議論ではないものであれば可能だと思う。いろんな地域の課題を一度に解決できるのが、まちなかスタジアムだ。まちづくりで今まで日本の地方が失敗してきたのは車社会にしてしまったこと。東京のスタジアムは公共交通で済む。アウェーから来る人は観光客で、その人たちのためにも、まちなかにあった方がいい。

Q バーゼルのイメージを教えてほしい。

傍士氏 交通としては日本でいうJRが1本ありスタジアムを挟んでもう1本路面電車の線がある。地下には大きなショッピングセンター、上には107戸の高齢者施設がある。泊まったホテルではバーゼルの公共交通全てに使えるカードをくれた。官か民かでなく、パブリックかどうかという発想がすごく充実していた。スポーツのチケットを見せただけでもバス、電車に乗れる。ドイツの都市交通、バスや電車を運営しているのは民間だが、契約によってパブリック交通として使われている。赤字は地元で負担していた。

Q 改めて中央集権と地方分権が気になった。中央集権的な発想から地方分権的に変えていくタイミングは。

傍士氏 「高知ユナイテッド」は今の社長なってから



「まず見に来て」と言っている。1回来たら2回、3回と来てくれる。みんなのクラブということで客が増えた。サッカーを見に行くというより、高知を応援しようという気持ちに変わっていた。向こうからスポンサーになりたいというのもあり、一番すごかったのはカシオ。高知の出身だが縁があるのはカシオワールドオープンのゴルフだけ。気持ちを動かせるかどうか、人対人の問題だ。商店街の会員になったら皆さんが急に応援してくれるようになり、商店街に垂れ幕を下してくれるなど存在感が変わった。高知新聞の社長、高知銀行の会長も取締役になってくれた。去年の7月に県がスポーツツーリズム課を新設し、そこが事務局になり、財界、自治体の長を集めて「高知ユナイテッドを応援する会」を発足させた。

Q 若い人は地元に愛着がありながら仕事の面で県外に出なければいけない部分はある。地域の働きかけ、大人側の行動にお気づきの点があれば。

傍士氏 高知にない大学を目指すことは止められないが、その後のフォローはしていない。今まで見てきて言えるのはベガルタ仙台、アルビレックス新潟ができた時、小さな時から応援していたら地元を離れると応援できなくなるので、地元の学校に行こうという動きが増えたと聞いている。高知の場合は人口減少、高齢化、少子化だ。私がEUで見た限り、誇りをみんな持っていた。たとえ小さくても皆さん「うちなんて」の発想はなかった。

第32回 EU 講座（設立15周年記念）

「大岡弘武のワイン造り フランスから岡山へ」

ラ・グランド・コリーヌ・ジャポン(株)代表 大岡 弘武 氏

EUとの交流促進を目指す岡山EU協会（梶谷俊介会長）の第32回EU講座が2月10日（月）、岡山市北区のANAクラウンプラザホテル岡山で開かれ、ラ・グランド・コリーヌ・ジャポン(株)代表の大岡弘武氏が「大岡弘武のワイン造り フランスから岡山へ」と題して講演した。会員ら約40人が聞いた。

開会にあたり梶谷会長が「岡山EU協会は2009年12月に岡山経済同友会が中心となり産官学などで設立、昨年12月で設立15年を迎えた。会員の皆さまのご支援の賜物であり感謝申し上げる。EUは立場の違う国々が一緒に新たな取り組みをしている社会の実験場である。今後もEUから多くのことを学ぶとともに岡山の魅力をEUに向けて発信できればと思う。本日はフランスで20年にわたりワイン造りをし、現在は岡山市にて自然派ワインを造っていらっしゃる大岡様のお話を伺う。途中でワインの試飲もあると伺っているので、



皆さん存分に楽しんでいただきたい」とあいさつを行った。

講演に先立って、(株)丸五会長の藤木茂彦氏より「フランスで自然派ワインのヴィニュロンとして認められていた中で、日本に帰国、東京都出身にも関わらず岡山でワイン造りをされている。なぜ岡山なのかなどいろいろお聞きしたい」と大岡氏の経歴が紹介された。

大岡氏は大学時代にフランスワインに出会い、フランスボルドー大学醸造学部に入学、その後20年にわたり本場フランスで腕を磨き、自然派ワイン造りの第一

人者としての地位を確立されたことなどの経緯を話し、子どもの教育の関係もあり、新天地を求め2016年に岡山に移住。自然派ワインを醸造する「ラ・グランド・コリーヌ・ジャポン(株)」を立ち上げ、ブドウ栽培とワイン醸造を手掛けられている。

講演では消費者の安心・安全志向を受け、ワイン大国のフランス、イタリア、スペインで有機栽培のブドウ園が増えていることを説明し、「日本食はヘルシーであり、また有機農業の先進国というイメージがある」と指摘、国産ワインの勝ち筋を示した。

岡山では地元のブドウ生産者で育種家の林慎悟氏とワイン用の新品種を開発していることなどにも触れ、新品種を使った赤ワインやマスカットを使った白ワインの試飲も実施し、テイスティングのコツなども伝授した。講演後は着座にて和やかに懇親会が開催された。



Europe Day Reception 2025に参加しました

岡山EU協会 前会長 梶谷 俊介

駐日欧州連合（EU）代表部から岡山EU協会会長あてに招待状が届き、5月14日（水）に東京都内にあるヨーロッパハウスで開催されたEurope Day Reception 2025に参加してきました。Europe DayはEUの中核となる構想を1950年5月9日に当時のフランス外相、ロベール・シューマンが提唱したことを記念する日で、EUにおいては重要な日です。

当日は駐日欧州連合大使のジャン＝エリック・パケ氏や、昨年に岡山にもお越しいただいたアイレ・コーケ氏



ク政治・広報部長をはじめ、駐日EU代表部の幹部や職員の方々、EU各国の大使等が参集、また日本国からも議連関係者、各省庁の幹部の方々、EUとの交流を図りたい地方自治体からも参加されていました。



最初にパケ大使の挨拶と日本から法務副大臣や関係議員等が祝辞を述べられた後、立食パーティーが開催され、ワインやヨーロッパの地域料理を食べながらざっくばらんに意見交換をしながら交歓を進めておられました。

ヨーロッパハウスは閑静な住宅街の中にあり、EU代表部のほか、外交官の住居棟もありEUを感じることができる場所でした。EU代表部の中にはEU協会を担当する部局も入っており、岡山EU協会の会員で一度訪問して、意見交換させていただくと良いと感じました。

岡山EU協会よりお知らせ

第34回 EU 講座ご案内

- 日時 2026年2月10日(火) 16:00~17:30
- 会場 ANAクラウンプラザホテル岡山
1階 曲水の間
- 講師 田口 雅弘 氏
環太平洋大学 特任教授
- 演題 「未定」

岡山EU協会 事務局

T 700-0985 岡山市北区厚生町3-1-15
岡山商工会議所ビル5階
(一社)岡山経済同友会内
T E L : 086-222-0051
F A X : 086-222-3920
E-mail : jimukyoku@okayama-eu.jp
U R L : <https://okayama-eu.jp>